

刀剣の歴史と思想

第16回

酒井 利信

『平家物語』にみる三種の神器

三種の神器は天皇の位を象徴するものであり、そもそも天皇を中心とした公家の社会にかかわるものであったが、その時代、実際にはこれが重く扱われてはいなかった。

しかし、これが武士集団が台頭し、武家社会となると様相は大きく変わる。

三種の神器は、源平争乱を契機に、一躍歴史の表舞台に踊り出し、その中でも宝剣である草薙剣がひととき注目をあびることとなる。

今回は、『平家物語』を手がかりにこの辺りを探っていききたい。

▼三種の神器争奪戦

いまさら『平家物語』を紹介する必要もないと思うが、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす」、ではじまる中世日本を代表する文学作品といえよう。当時最大の武士集団であった平家の栄華と、その後の没落から滅亡への過程を描いた、まさしく諸行無常の世にあつて盛者

必衰をモチーフとした、いわゆる軍記物語である。時代は、宮廷貴族の世から武家が台頭しその後の日本史を事実上長く動かすようになる、歴史的な大転換期にあたる。『平家物語』の成立については明らかにないことが多いが、鎌倉時代初期の成立といわれ、そもそも盲目の琵琶法師の弾き語りにより語りつがれてきたものであり、中世において広く人々に享受された。この『平家物語』に、おびただしいほどの三種の神器に関する記述がみられる。



刀剣の歴史と思想

『平家物語』にみる三種の神器



安徳天皇を祀る赤間神社（山口県下関市）

前の時代、「三種の神器」の表記すらみられず、神器そのものがさして重く扱われることのなかったことから考えると、ここに思想としても大きな変化があったと考えてよいだろう。

以下、『平家物語』の描写をながめてみたい。

▽主上 都落

源平争乱の最中、いよいよ旗色が悪くなり都落ちを余儀なくされた平家は、後白河法皇にも離反されて大きな打撃を受ける。平家は当時まだ六歳の幼い安徳天皇をともしない、内侍所（宝鏡）・神璽（曲玉）・宝剣の三種の神器をもって、京の都から西海へと落ちてゆく。このことが後に大きな問題に発展する。

▽福原落

旧都である福原に到着した平家であるが、一門の総帥である宗盛が次のように説く。「おまえ

たちは一時的な家来ではなく先祖代々の家人である。代々恩義の厚い者もいる。平家が栄えていた古には、その恩恵をこうむって自分たちの繁栄を願ってきた。今どうしてその恩恵に報いないでよいということがあるうか。そのうえ十善帝王（安徳天皇）が三種の神器をたずさえて行幸されているのであるから、いかなる野の末、山の奥までもお供しようとは思わないか」と。

この後、平家は海路九州へと落ちてゆく。

▽山門御幸

法皇は、安徳天皇が平家に囚われ西海の浪に漂っていると嘆き、天皇ならびに三種の神器を返還するよう院宣（法皇の命令をうけてだす公文書）をくだした。

しかし、平家はこれを受け入れなかった。

▽三草勢揃

源・範頼と義経は、院の御所に参上して、平家追討のために西国へ向かうことを申しあげると、後白河法皇から「わが国には神代より伝わる三つの御宝がある。内侍所と神璽、宝剣がこれである。よく注意して無事に都へお返し申しあげよ」と命ぜられた。両人は、つつしんでこれを承った。



▽内裏女房

一谷の戦で捕虜となった平重衡に、院の御所から使いとしてやってきた藏人左衛門権佐定長がいうには、「法皇が仰せになるには、八嶋に帰りたいければ、一門に申しおくって三種の神器を都へお返ししろ。そうすれば八嶋に帰すであろう、ということであつた」と。それに対して重衡は、「重衡の命千人であつても万人であつても、三種の神器を返そうとは、内大臣（宗盛）以下一門の者はひとりとして申すことはないであろう」と申された。

▽八嶋院宣

後白河法皇は、「天皇は宮城をでて諸国に行幸し、三種の神器は南海、四国にうずもれて数年がたつ。これは朝廷の嘆きであり亡国のもとである。そもそも重衡は東大寺焼失の逆臣であり、頼朝のいうように死罪にするところであるが、三種の神器を返還するならばゆるして釈放するであろう」という内容の院宣を下す①。

▽逆櫓

しかし、平家側は、これにも応じない②。義経がいよいよ都を立つて八嶋へ攻め寄

せようというときである。伊勢大神宮、石清水八幡宮、加茂、春日神社へ勅使がおくられ、主上ならびに三種の神器が無事に返ることを祈禱するように命じられた。

多く引用してきたが、いずれも三種の神器争奪をめぐる源平双方の激しいやりとりの模様である。源平ともに執拗なまでのこだわりがあり、三種の神器に対する執念すら感じられる。平家は三種の神器をもち、これを精神的支柱とした。一方源氏は、はじめ公権力にものをいわせて神器を奪還しようとするが、これがかなわなければ策をめぐらし取り引きをしようとする。結局これも果せずに最後は神頼みでする。興味深いのは勝ち戦をしている源氏がこういった行動にでているということである。そして平家も絶対にこれを手放さなかった。つまり戦況に関係なく三種の神器へのこだわりがあつたということであり、両軍いかにこれを重視していたかということである。彼らをこういつた行動にかりたてた心理的背景はいかなるものだったのだろうか。

まず彼らにとって重要なことは官軍③

としての立場である。つまり天皇側の立場にありながらの戦いであるのか否かということである。源平ともに一族の存亡をかけて戦っているのであるが、正義の味方として戦っているのか、それとも悪者として戦っているのかという社会的立場の問題である。大きく世間をまきこんで武力を行使していることの大義が必要であつた。

天皇の位を継承するものが代々三種の神器を受けついでいく制度は、この時代までに確立しており、社会の中ですでになじんでいる。この三種の神器をもっているかどうか官軍と賊軍の境になっているということである。

さらに『平家物語』を見渡して気づくことは、この社会的立場の違いは天皇と同行しているかどうかということより、三種の神器をもっているかどうかにかかっているような傾向が強くある。安徳天皇がまだ幼く実際の政治能力がなかったであろうことは別に、三種の神器の優位性を感じる。

公家社会であつた前時代に、神器は社会のなかでさほど大きな機能を果たしていなかったが、ここにいたって三種の神器は武



刀剣の歴史と思想

『平家物語』にみる三種の神器

家の社会的立場を決定づける重要な役割を果たしている。公家の中核である天皇の位の象徴が、公家の社会ではさして重視されず、武家社会になつてはじめて脚光をあび、かくも重視されたことに三種の神器の面白さがある。

▼壇ノ浦での宝剣紛失

『平家物語』最大のクライマックスは、平家一門の最期の様子を描いた壇ノ浦の合戦であろう。

三種の神器のことが宝剣に特化してくるのはここからである。まずは「先帝身投」の件からみていきたい。

源氏の兵ども、すでに平家の舟にのりうつりければ、水手梶取ども、ゐころされ、きりころされて、船をなをすに及はず、舟ぞここにたはれふしにけり。新中納言知盛卿小船にのゝて御所の御舟にまいり、「世のなかいまはかうと見えて候。見ぐるしからん物どもみな海へいれさせ給へ」と

て——中略——二位殿はこの有様を御らんじて、——中略——神璽をわきにはさみ、宝剣を腰にさし、主上をいだきたてまゝて、「わが身は女なりとも、かたきの手にはかゝるまじ。君の御ともにまいるなり。御心ざしおもひまいらせ給はん人々は、いそぎつゞき給へ」とて、ふなばたへあゆみいでられけり。主上ことは八歳にならせ給へども——中略——「尼ぜ、われをばいづちへぐしてゆかんとするぞ」と仰ければ、いとけなき君にむかいたてまつり、涙をさへ申されけるは、「君はいまだしろしめされさぶらはずや。先世の十善戒行の御ちからによつて、今万乗のあるじと生れさせ給へども、悪縁にひかれて、



現在の壇ノ浦（山口県下関市）



御運ごうん既すでにつきさせ給たまひぬ。まづ東ひがしにむかはせ給たまて、伊勢大神宮いせだいじんぐうに御おんいとま申まうさせ給たまひ、其後そののち西方浄土さいほうじやうどの来迎らいかうにあづからんとおぼしめし、西にしにむかはせ給たまひて、御念仏ねんぶつさぶらふべし。この国くには心こゝろうきさかゝるにてさぶらへば、極楽浄土ごくらくじやうどとてめでたき処ところへぐしまいらせさぶらふぞ」と、なく
く申まうさせ給たまひければ、——中略——二位殿にいたるやがていただき奉たてまつり、「浪なみのしたにも都みやこのさぶらうぞ」となぐさめたてまこゝて、ちいろの底そこへぞいり給たまふ。

壇ノ浦の戦いは海戦である。源氏の兵どもがすでに平家の舟にのりうつり、漕ぎ手も舵取りも射殺され、あるいは斬り殺されるなどして舟は操舵不能となる。新中納言知盛卿しちもろりは天皇のお乗りになっている舟にきて「平家の世もいよいよこれまでかと思われます。見苦しいものはみな海にすててください」と申し上げた。この有様ようさまをご覧になった二位殿にいたること平清盛の妻時子ときこは、神璽しんじ（曲玉）を脇にはさみ宝剣を腰にさし、安徳天皇を抱いて「わたしは女であっても敵の手にはかかりません。君のお供をして

参ります。帝みかどを思うものは急いであとにつづきなさい」と言い、舟ふねばたに歩まれた。今年八歳になる天皇が「私をどこへ連れて行こうとするのか」と言われたのに対し、涙をおさえて「君はまだご存知ではございませんか。前世での善行によつて天子としてお生まれになりましたが、悪運にひかれてご運はすでに尽きました。まず東に向かつて伊勢大神宮にお暇を申しあげ、そのあと西方浄土の仏菩薩に迎え導いてもらえるよう西に向かつて念仏をお唱えください。この国は迎ひなどところです。極楽浄土というめでたいところへお連れします」と申し上げた。そして二位殿は天皇を抱き、「浪の下にも都がございます」との言葉を最後に、



赤間神社内、平家一門の墓



刀剣の歴史と思想

『平家物語』にみる三種の神器

海底に沈んでいったのである。

平家の敗北が決定的となった場面での安德帝の身投げ、そして神璽と宝剣入水のシーンである。

神璽は、この後、片岡太郎経春つねはるという者が箱ごと海上に浮かんでいたものを取り上げ、無事であった。

では宝鏡はどうしたのかという疑問が残るが、これについては「能登殿最期」の件に記述がある。

大納言の佐殿すけどの（平重衡の妻）は、内侍所（宝鏡）のはいつた櫃ひつをもつて海に入ろうとしたが、袴のすそを舟はたに射つけられてとりおさえられた。武士どもが内侍所の

入った櫃の鎖をねじ切つて蓋を開けようとしたとたん、彼らはたちまち目がくらみ鼻血を出した。生け捕りになっていた平大納言時忠ときただが「それは内侍所であるぞ。凡人が見てはならぬ」と言うと、兵どもはみな立ち退いた。といった内容である。

つまり、宝鏡は無事であった。

その後「内侍所都入」の件で、四月三日に、九郎大夫判官義経が源八広綱を院の御所につかわして、「去る三月二十四日、長門国壇ノ浦において平家を攻めおとし、三種の神器を無事にお返しする」むね申しあげたので、院中はいへんな騒ぎとなったことが記されている。しかし、二十五日

の夜の子の剋く（十二時ごろ）に、内侍所と神璽の箱は太政官の庁に届けられたものの、宝剣は失われていたことが記されている。

宝剣の紛失が決定的となった描写である。

三種の神器の中で宝剣である草薙剣は、壇ノ浦の事件で紛失してから、ことさら注目されるようになる。

中世神話としての「剣」巻

『平家物語』には「内侍所都入」の次に



刀剣の歴史と思想

『平家物語』にみる三種の神器

「剣」巻といわれるものがある。平曲⁽⁴⁾の秘事として当時大変に尊重されたもののようであるが、内容的には全体のなかでかなり異色の感がある。ヤマタノヲロチ神話、天孫降臨神話、神剣の模造、ヤマトタケルの東征、神剣盗難、宝剣入水、宝剣紛失の理由など、記紀神話からはじまる草薙剣の由来について述べている。

おおむね記紀神話などの内容に準ずるものであるが、独自のおもしろい解釈もしている。

ある博士^{はかせ}のかんがへ申けるは、「むかし出雲^{いづも}国^{くに}ひの川^{かは}上^{かみ}にて、素戔^{すさ}鳥^{とり}の尊^{みこと}にきりころされたてまつし大蛇^{おほいづみ}、霊剣^{れいけん}をおしむ心ざしふかくして、八^やのかしら八^やの尾^おを表事^{へうじ}として、人王^{にんおう}八十代^{はちどう}の後^{のち}、八歳^{はちさい}の帝^{てい}となつて霊剣^{れいけん}をとりかへして、海底^{かいぞう}に沈^{しず}み給^{たま}ふにこそ」と申す。千^ちいろの海^{うみ}の底^{そこ}、神龍^{しんりゅう}のたからとなりしかば、ふたゝび人間^{にんげん}にかへらざるもことほりとこそおぼえけれ。

あるものが占^うつていうには、「むかし出雲^{いづも}の国^{くに}の肥^ひの川^{かは}上^{かみ}でスサノヲに斬^きり殺^{ころ}され

た大蛇^{おほいづみ}が、霊剣^{れいけん}を惜^{おし}しむ気持ち^{こころ}が深く、八つの頭^{あたま}と八つの尾^おを示^しして、人王^{にんおう}八十代^{はちどう}の後^{のち}、八歳^{はちさい}の帝^{てい}となつて霊剣^{れいけん}を取り返し海底^{かいぞう}に沈^{しず}んだのであらう」と。海の底^{そこ}で神龍^{しんりゅう}の宝^{たから}となつたのだから、ふたたび人間^{にんげん}のもとに戻^{かへ}らないのも道理^{ことわり}であると思^{おも}われる。といった内容^{りよう}である。

宝剣^{ほうけん}がなくなつたことについての独自の解釈^{かいしやく}である。

三種^{さんしゆ}の神器^{しんぎ}をもつものは官軍^{くわんぐん}であり、正義^{せいぎ}の味方^{たきほう}は勝^{かち}たなくてはならなかつたが、実際^{じっし}にはこれを有^あする平家^{へいけ}は亡^なびた。それゆえに神器^{しんぎ}は海底^{かいぞう}に沈^{しず}まなくてはならなかつたが、さらにこのうち宝剣^{ほうけん}のみが紛失^{ふんしつ}する。ここにはひとつの歴史^{れきし}の綾^{あや}のようなものを感じるのであるが、これを『平家物語』なりに解釈^{かいしやく}したものが、「剣」巻^{けんまき}の独自の解釈^{かいしやく}ということにならう。

古代神話^{こくたいしんわ}を基本^{きほん}としながらも中世^{ちゆうせい}において焼^やき直^{なお}しがなされた、いわゆる中世神話^{ちゆうせいしんわ}である。こういった新しい神話^{しんわ}が創造^{そうぞう}されること自体^{じたい}、草薙剣^{くさなぎけん}への注目^{ちゆむ}度がうかがわれる。

〈註〉

(1) この院宣^{いんせん}については、物語^{ものがたり}の虚構^{きこく}という説^{せつ}もある。

(2) 平家側^{へいけがわ}の描写^{めいぎやう}として、以下^{いぎや}のような内容^{りよう}の記述^{きじつ}がある。

新中納言^{しんちゆうなごん}知盛^{とももり}が諫^{かん}めていうには、「三種^{さんしゆ}の神器^{しんぎ}を返還^{へんげん}しても重衡^{じゆうかう}が返^{かへ}されることとはないであらうから、その旨^{しづめ}を返書^{へんしよ}でかくべきだ」と。大臣^{だいじん}もこれを承諾^{じゆんかく}して返書^{へんしよ}を書^かいた。(請文^{うけがみ})

これをうけて源氏側^{げんしがわ}の捕虜^{とほろ}となつた重衡^{じゆうかう}がいうには、「重衡^{じゆうかう}ひとり^{ひとり}を惜^{おし}しんで、わが国の重宝^{じゆうほう}である三種^{さんしゆ}の神器^{しんぎ}を返還^{へんげん}するとも思^{おも}われないので、このような返書^{へんしよ}の趣旨^{しゆし}は予想^{よそう}していた」と。(戒文^{かいぶん})

(3) 「官軍^{くわんぐん}」という言葉^{ことば}自体^{じたい}、後の時代^{のちのじだい}のものであるとの指摘^{しうさ}もあるが、ここではこの語^{ことば}により読者^{よきや}のニュアンス^{ニュアンス}を喚起^{くわんき}し、理解^{りかい}を容易^{りようい}にするためにあえてこの語^{ことば}を使用した。後述^{こうじゆ}の「賊軍^{さくぐん}」も同じ。

(4) 琵琶^{ひば}の伴奏^{ばんそう}で弾^はき語^{ことば}りをする語^{ことば}り物^{もの}としての『平家物語』。